「男子、ちゃんと歌って！」の歴史社会学

―「変声期」男子の教育をめぐって―

早稲田大学　森山至貴

1.目的

校内合唱コンクールの練習中、真面目に歌おうとしない男子にしびれを切らした女子が「男子、ちゃんと歌って！」と声を荒らげる…この定型化したエピソードから、人々はさまざまな要素を読みとる。一方では熱心な女子／やる気のない男子という対比、あるいは音楽と女子の結びつきといったジェンダーに関する指摘がなされ、他方では合唱あるいは教育そのものが抱える「集団主義」の「気持ち悪さ」への拒否反応が示される。

本報告は、そのような読みとりの当否ではなく、そもそも「真面目に歌わない男子」という問題構成がいかなる歴史的な経緯によって成立したのかを明らかにするものである。そのことによって、教育とジェンダーの連関について、現状把握やそれに対する短期的な処方箋にとどまらないインプリケーションを提示することを目指す。

2.着目点としての「変声期」

上記の目的のため、本報告が着目するのは、「変声期」という概念である。「変声期」という概念は、一方で歌えない男子の身体という「実体」を根拠づける概念として、他方で隣接する「思春期」といった概念と結びつきながら「男子は歌いたがらない」といった「心性」を根拠づける概念としてはたらき、「真面目に歌わない男子」という問題構成に多層的に基盤を与える。

子どもをめぐる近年の研究においては、子どもを身体という物質的な実体と、規範・心性といった構築物の二項対立のどちらかに回収してしまう単純化された議論に対する批判が蓄積されている(Prout 2017, 元森 2012)。

本報告も、「実体」と「心性」のどちらに関するとも言い切れない「変声期」概念に着目することで、「実体か構築か」という粗雑な論点に与せず分析と考察をおこなう。

3.分析対象

本報告が分析対象とするのは、「変声期」という単語が「中学校教授要目」に記載された 1902 年(明治 35 年)以降の期間の教育に関するさまざまな文書資料である(土田 2015)。なお、唱歌教育自体は 1872 年(明治 5 年)の学制成立によって小学校ではじまっている。

4.結論

当日の報告では、「男子が歌わなくてよい」根拠として持ち出された「変声期」概念が「男子が歌う」ことを阻害しない(はず)のものへと変容していく流れを中心に、「真面目に歌わない男子」という問題構成が次第に形をなしていく過程を明らかにしていく。

文献

元森 絵里子，2012，「「子ども」は実体か構築かという問いをめぐって:『明治以降教育制度発達史』を事例とした子どもと教育の社会学の視角についての一考察」『社会学評論』63(1): 124-135.

Prout Alan，2017，『これからの子ども社会学：生物・技術・社会のネットワークとしての「子ども」』新曜社.

土田陽子, 2015, 「中学校と高等女学校における音楽教育とジェンダー：音楽教育の位置づけと意義の変容過程」小山静子編『男女別学の時代：戦前期中等教育のジェンダー比較』柏書房, 165-208.